

平成25年度第2回府中市立図書館サービス検討協議会 会議議事録

日時 平成25年10月3日(木) 午前10時から午後1時
会場 ルミエール府中 5階会議室
出席者 栗田博之委員、鬼丸晴美委員、小島茂委員、野口武悟委員、茅原幸子委員
高田小百合委員、金沢利典委員
事務局 佐々木図書館長、坪井図書館長補佐、岡田地区図書館担当主査
菅沼、伊藤(記録)

1 開会

事務局 これより平成25年度第2回サービス検討協議会を始めたい。今回、傍聴希望者はなかった。

2 議題 中央図書館開館5年目を迎えての図書館サービスの見直しについて

会長 今回で今年度2回目の協議会となる。中央図書館開館5年目を迎えての図書館サービスの見直しについて、事務局から説明をお願いしたい。

事務局 PFIは全体で15年間の契約期間だが、5年ごとにシステムの入替えを行う。昨年の11月にまる5年を迎え、11月18日から11月末まで休館し、システムや機器を入れ替えた。利用者にとって使いやすくなるよう改良をしたが、それについて委員の皆様のご意見をいただきたい。

会長 これについては審議というよりは報告事項なので、委員の皆さんから何かご質問があればお願いしたい。システムのバージョンアップ後の使用感にも関わってくるので、バージョンアップについて事務局からの簡単な説明をお願いし、その後委員の皆さんからのご意見やご質問をお願いすることにしたい。

事務局 資料1の新システム移行後の図書館ホームページの追加機能一覧では、開館から5年経ち、改良の必要がある点を検討し実際に改良した点をまとめている。これは実際に休館明けに図書館ホームページのお知らせ欄に掲載したものと同様の内容になっている。資料2は館内OPACの操作ガイドで、実際に利用者が使うOPACの脇に置いているものと同じものだ。この操作ガイドには実際のOPACの画面を載せていて、操作手順に従っているのだからわかりやすいのではないかなと思う。バージョンアップに際し、利用者からのご意見を参考にしたが、中でも割合多く寄せられたのが順番予約の機能だった。巻次が早いものから順番に読みたいのに、後のものが先に用意できてしまい、予約のし直しになる不都合があった。順番予約はこれまでもカウンターや電話なら対応できていたが、せっかくウェブで予約ができるのだから、ウェブでもできるようにしてほしいという声が多かった。また、マイブックリスト機能も追加した。これは、以前どのような資料

を借りていたか記録したいという利用者の声があったため追加された。まだまだこうしてほしいという意見は出てくるとは思う。次回のバージョンアップは4年後になるが、委員の皆さんにもこの機会にご意見をいただきたい。

会長 ご意見やご質問などがあればお願いしたい。

鬼丸 ソフトはどこを何を使用しているのか。

事務局 NECのLICSを使っている。PFI契約期間の15年間はそのまま同じシステムを使用する。

会長 他にはどういったところがあるのか。

事務局 大手では富士通、丸善などがある。また、最近は色々な企業でクラウド事業に参加している。図書館ではNECの職員は常駐していないが、月に1度、NECの担当者との打ち合わせをしている。

会長 災害対応の面でクラウドは有効だ。独自でサーバー機器を設置している場合、それが被害を受けると、データの消失が起こりうる。クラウド化すればデータの管理先も分散できる上にセキュリティの面でも安全性が高い。また、機器のメンテナンスも楽になるという利点がある。危機対応という点でクラウド化が主流になってきている。

事務局 15年間の契約期間と5年ごとの更新となると、ある程度決まった予算内でのバージョンアップになってしまうので、どうしても限界はある。

会長 本来は5年契約くらいの方が、現代のテクノロジーの発展を考えると望ましい。

事務局 コスト面もそうだがクラウド化の安全性も含めて検証する必要がある。

会長 本学は来年度新システムを導入する。費用がわずかだが抑えられた。これはクラウド化したためとは一概には言えないが、今後のテクノロジーの発展のスピードを考えると、コストも下がっていくのではないか。また、これまで業者が来て対応してもらっていたことを遠隔でできるようになる。最近は雷が多く、雷で停電するたびにシステムの復旧作業が必要となる。これもクラウド化を進めていけば対応が容易になる。サーバーを独自に設置するのであれば、バックアップ体制をきちんと整える必要があるが、バックアップ自体をクラウド化すればそういった問題も解消される。コスト面については、機器よりもシステムに費用がかかるので大きな削減になるということはない。コストの削減というよりは新しいシステムの導入によって利便性が上がるということになる。将来的には個々でサーバーを管理するのではなくクラウド化して管理するところが増えていくのではないかと思う。どこか先行してクラウド化する図書館が出てきたら経過を見て参考にしてみようか。

鬼丸 クラウドという言葉が広く知られるようになる3年前から、本学では遠隔操作によるシステムの管理をしていた。以前から使用していたシステムの契約更新の際、業者から今後はシステムエンジニアを派遣せず完全に遠隔操作にしたいという提

案があった。システムの改善についてもプログラム自体を変える必要のないものであれば対応してくれるし、同じシステムを使っているところから要望が複数あれば業者は改善し、それがリモートで入ってくるので便利だ。

事務局 仰るように、システムの入れ替えをしなければいいものは入ってこない。そのためにシステムのバージョンアップを5年毎に行っている。途中で改善となると別途費用がかかってしまう。

鬼丸 本学では生徒2000人分の情報を管理しているが、生徒の学年が上がったと同時にシステム上でも情報が引き継がれていかないと困る。しかし、それも電話対応で一晩のうちに遠隔操作で処理してもらえる。2000人規模だからか、何か不具合があれば微調整も利く。2000人規模でできるのなら20万人規模でもできるのではないかとも思うが。

会長 システム自体の改修がどのくらいのペースで行われるのかも関係してくるかとは思ふ。それを考えると、5年に1度の更新では使っているシステムがどんどん古くなる。現在の流れとしては大学図書館等ではクラウド化するところが増えていく。機器とシステムをセットで管理していくより、システムだけを考えればよいとなれば管理はずっと容易になる。先ほども話したが、災害で停電が発生したとき、自分たちで管理しているより業者に任せておく方が安全性も高い。一番心配なのは蓄積されたデータが消えてしまうことで、それらを物理的に記憶させている機器を分散させるという意味でもクラウド化した方がよい。

鬼丸 落雷のため停電したことがある。データは他で管理していて無事なので、学内のパソコンの電源が復旧すればすぐに使用できるようになる。端末が立ち上がるまで昔ながらの方法で資料番号の下5桁をメモしておいたり、返却分はまとめて置いておいて、立ち上がったらずちにシステムで処理をすることになる。

会長 自家発電装置を設置するにしてもコストがかかる。それならば、バックアップも含めて業者に任せてしまった方がよい。

鬼丸 以前、半年前のこの日のデータがほしいと業者に頼んだら提供してもらえたので、たとえ消えてしまったとしても復元はできる。

事務局 15年間の契約期間と契約内容の中に組み込まれている枠はあるが、今お話が出た事項については、10年後に決める話ではなく今から検討すべきことだ。会長のお話のように、先行してどこかの図書館が導入するのであればその経過を見てみたい。以前 業者主催の講演会の際に、山梨県立図書館がクラウド化したことを大々的にアピールしていた。次回のバージョンアップの際に業者側からそういった提案が出るかもしれない。

鬼丸 利用者の要望をバージョンアップの際に反映させたことはわかるが、図書館としての要望はなかったのか。

事務局 利用者にとっての利便性を向上させるための提案は図書館としても出したが、全

体のバランスもあり利用者の要望を優先した。

野口 O P A Cで検索できる範囲は図書館、情報公開室とどこか。

事務局 あとはふるさと歴史館の公文書史料も検索できる。

金沢 それに都立図書館は入っていないのか。

事務局 都立図書館のホームページでの蔵書検索はできる。

野口 都立図書館のホームページに統合検索という都内の公共図書館間の蔵書検索機能はある。公開型にするのかは別として、最近では学校図書館を含めた所蔵情報をデータベース化し、市内の各施設の蔵書検索ができる総合目録にする傾向にある。そういったものが学校側としても欲しいのではないか。

小島 どこの学校にどういった蔵書があるのか調べられるような、総合的なデータベースがあればよい。バーコードを貼っても、学校図書館には現在オンラインでつながっていないし、パソコンもないという状況だ。

事務局 せめて自分の学校図書館の蔵書の管理ができるようになればよい。公立図書館に学校図書館のデータがついていて、公立図書館の職員用のシステムで学校図書館も含めた検索ができるようにしたところがあると聞いた。

野口 さいたま市など、比較的そういった公立図書館は多い。

事務局 学校との連携をうまくとっていく必要性を感じる。

野口 学校図書館を含めたシステムにするとして、15年間の契約期間で5年が過ぎたところなので、あと10年はこのままということになるのか。総合目録が実現している自治体は、どこがイニシアチブをとっているのか情報収集をし、図書館の方からも学校教育の担当にこういった取り組みがあることをPRしていけばどうか。

鬼丸 埼玉県の白岡市は総合目録化が早かった。過疎地の高齢者を見守りたいということで教育委員会の教育指導主事が率先して実現した。未来を担う子どもの教育は最優先するべきではないか。もし、学校の図書館に1台パソコンが入り、運用ソフトも入ったとして、学校が独自に運用していてもよいのか。公立図書館は何も関与しなくてもよいのか。

事務局 以前バーコードを貼った経過からも図書館が教育部と連携をとる部分もあるかも知れない。

鬼丸 最近の子どもはスマートフォンの使用に慣れ、辞書を引くのも紙ではなく電子辞書のためか、五十音順やABCもわからない子が多い。そのため文字が読めない、漢字などもってのほかという状況にある。映画を観るにも字幕が追えないため吹き替えを観ることが多いようだ。本を読むことの面白さを早い段階で教えたいが、ハード面が追い付いていない現状がある。

事務局 学校はそうした状況の中で本の紹介をしたり読書の時間を設けたりと努力をしている。

- 鬼丸 例えば「新美南吉」が何を書いたかなども、子どもたちもそうだが若い先生も知らない。指導する側もいきなりプロになれるわけではなく、養成されていくものだ。本を探すときにインターネットで探すよりも府中市の図書館でデータを検索することの方が、教育的に直結するので好ましい。
- 野口 もっと身近なところで、自分の学校図書館にどういった資料があるのかわかるようになればなおよい。公立図書館ばかり発展していても、より身近な学校図書館の利用に慣れていかなければ将来の公立図書館の利用者は育たない。
- 小島 自分の学校の図書館で本を検索して、自分の学校にはないが公立図書館に行けば読めるとわかるようになればよい。市内全域の図書館の検索ができれば便利だ。
- 茅原 図書館の指導補助員にも検索のプロとして育ててほしい。専門の方との連携もうまくやってほしい。また、人がいても機械化が遅れているのはもったいないと感じる。
- 鬼丸 対応が遅すぎるように感じる。ゆっくり構えていて、子どもたちが大人になってから本を読むかという、そうは思えない。スマートフォンなどよりも読書の習慣を早いうちにつけるようにしていかなければいけない。
- 小島 本校では朝読書の時間を設けている。小学校1年生から6年間続け、読書の習慣をつけることで将来の公立図書館の利用者に育てばよいと考えている。
- 鬼丸 小学校1年生はまだ自我がきちんと育っていないこともあり、早すぎるのではないかと思う。小学校高学年から読書の習慣づけを指導をしていくのがより効果的かと考える。子どもたちにとっても本は買うより借りた方がお金がかからないという点で都合がよい。また、子どもにとって自分で行動した結果手に入れたという経験が必要だと思っているので、図書館はそういう場にうってつけではないか。図書館が子どもにとっての憧れの場所になるように、地域の人が子どもを見守るような温かい雰囲気を作っていければよい。
- 野口 こういった話をするのであれば、指導室の人がいた方がよい。私は小田原市の図書館協議会の委員もやっているが、そこでは学校教育の担当者も出席している。今年度は公立図書館と学校図書館の連携をテーマに協議している。このように、公立図書館が学校教育に関するテーマを示し、指導室の方に出席してもらえような働きかけが必要だと感じる。
- 鬼丸 来館者と貸出冊数がどの程度あるのかというデータは重要だ。広報に図書館のPRを載せるのも1つの手ではあるが、それよりも小学校に最寄りの図書館をピンポイントでPRするようなピラを配れば、より効果がある。図書館に行けばたくさん本があることを、学校も子どもたちに指導はするが、図書館側からの発信ももっとしてはどうか。公立図書館には学校図書館よりもはるかに多くの本があることを子どもたちに知ってもらいたい。
- 金沢 図書館が今できる学校との連携は何か。システムをつくっていくことも長い目で

見れば効果はあると思うが、連携にもなり図書館にとってもメリットがあるのは団体貸出とか課題図書や調べもの学習などではないか。そういったことは必ず需要があるのだから、図書館の実績にもなる。バーコードを貼ったというのは意味があると思うし必要性も感じるが、その運用については指導室との粘り強い交渉が必要になってくる。今すぐにできる学校との連携を考えるならば、団体貸出などを通じて子どもに読書習慣をつけさせることや本の扱いなどを教えていくことがより効果的だと思う。そういった面で、公立図書館がどのような努力をしているのかを示していく必要を感じる。

事務局 学級貸出には力を入れている。今は図書館のホームページから先生が蔵書を検索し、貸出の際は FAX で依頼をするか直接来館して選書をするかたちで行っている。また、ご依頼があれば学校へ出向くこともあり、今月は公開授業でブックトークをさせていただくことになっている。

小島 今度、府中市の教員の図書館部で授業をするのでぜひお越しいただきたい。

事務局 そういった場を通して意見交換をしていけたらいいと思っている。

茅原 図書館側がもっと学校に出向いてほしい。図書館員の専門性の高さをを見せていただいて、司書の必要性を学校にも保護者にもアピールできればいい。

鬼丸 学校側は必要性を認めているのか。

小島 読書や司書の必要性は認めているが、教育のどこに重きを置くかは学校によって方針が異なる。

鬼丸 学校図書館研究部の第1回目が明星で開催された。山本指導主事も同席し、先生方も補助員の方も出席でき、50人程度出席者がいた。講演会ではなくオープンカフェ形式で1時間半行われ、授業の見学や現状の報告だけではなく、「今後子どもたちのために図書館ができることは何か」というテーマで意見交換をした。そこに参加した学校の先生方にも図書館補助員の意義を理解していただき、指導室にも伝わったのではないかと思う。公立図書館も遠慮せず図書館の活動をアウトプットしていけばよい。例えば、図書館の職員が小学校の公開授業に行ったのなら、それを学校のホームページだけではなく図書館のホームページにも掲載してはどうか。広くPRすることで、他の学校の校長先生にもそういった活動に参加してもらえるのではないか。子どもたちにとっても、知らなかった本を紹介してもらえたり、図書館にたくさんの本があることを教えてもらえるきっかけになる。

高田 図書館のホームページは保護者も見ていると思う。せっかくホームページをバージョンアップするのなら、一般の利用者や教育関係者などだけではなく、子どもを持つ親のニーズを意識した方がよい。図書館は大人だけでなく子どもにとっても楽しい場所であってほしい。そのためには活用方法をきちんと教えていく必要がある。例えば、本の検索をしたいがOPACの使い方がわからない、しかし、職員はカウンターの奥にいて聞きづらいということもあると思う。それも、声を

かけやすい雰囲気をつくってあげればすぐに聞けて、OPACの操作も自分でできるようになる。

事務局 OPACの操作方法や図書館の利用方法については、毎週水曜日と最終週の日曜日の14時から15時に講座を開いて紹介している。しかし、そういった講座を開催していることのアピールが足りないと感じている。

鬼丸 講座の時間は仕事している人には参加が難しいことが多い。

高田 ボランティア対応でできないか。

会長 図書館と学校との連携に話を移すが、公立図書館側が学校に出向くこと、あるいは子どもたちに来てもらうことをより積極的に行っていくことがまず優先事項になる。先ほどの話にも挙げた、開館時間の拡張やOPACの操作方法の指導といったことは来てもらうことへの方策だ。本を通じて将来の図書館利用者を育てていくには、まずは図書館側が学校へ出向き本の紹介やホームページからの検索方法を指導していくことが必要だ。図書館を日常的に利用する人のように、図書館に行き興味を持った本を手にとるという流れではなく、子どもたちが読みたい本を自宅などで検索し、あれば図書館に行くという流れであれば、開館時間や利用方法はその後の問題ではないか。図書館を学習や研修の場として利用するのであれば話は別だが、貸出や返却のみであれば、開いている時間に行けばよいのだから開館時間はさほど問題にならない。利用者からすれば24時間使えた方がよいが、それにかかる費用を考えると、優先事項としては下位になってしまうと考えられる。これまで利用者に対するサービスが拡大していることは明らかで、これ以上の拡大は予算的に難しいのではないか。現在の予算の執行状況を見ても、かなり限界にきているように思われる。

事務局 シーリングが毎年ある中で、図書館でいうとPFI事業が予算のほとんどを占めており、こちらの裁量が利く範囲が狭いという現状がある。

会長 残念ながら、予算の枠内で考えたとき、現在あまり有効性のないものは廃止し、その分をより有効性のあるものにあてていく方法しか考えられないのが現状だ。サービスをどんどんプラスしていくのではなく、必要のない部分を削っていくことが結果的にサービスの向上につながるようになると考えられる。

金沢 図書館側が現在取り組めることについて、先ほどの意見に加えたい。団体貸出と学校訪問はすぐにでも取り組める事項だと思う。図書館にとって、図書購入費を削られるのは一番の打撃であり、プラスにならないまでも平年並みを維持したいと考えられる。そこで、団体貸出をより大々的にアピールし、図書館が多くの蔵書を必要としている理由を外に知ってもらえばよい。新中央図書館の開館当初から児童室が狭いと感じていた。図書館で働いていた立場から言えば、図書館の3分の1にスペースを割くことが理想だと思う。現在の狭いスペースを補うという点でも、団体貸出によって常に本を動かしていることが必要だ。以前私が勤めて

いた図書館でも団体貸出は行っていたが、人気の本は10冊ずつ購入し、5冊を館内に、残りの5冊を学校への貸出しに回していた。そうでないと、図書館は飽和状態で、廃棄しない限り新しい本が入れられない。学級に何十冊単位で貸出すことでそういった状態を回避できる上、図書館としての学習支援になる。また、団体貸出の本を図書室に入れるのか、学級文庫に入れるのかでも大きく違ってくる。私が勤めていた図書館の自治体では各学級に本を置いていたので、膨大な冊数が動いていた。それを市民や議員に知ってもらうことで、実際に図書館の棚には並んでいないが、これだけの本を買う必要があるのだとアピールしてはどうか。続いて学校訪問についてだが、勤めていた図書館では新1年生を対象に、4月から5月にかけて1時間程度図書館の利用方法の説明や手遊び、読み聞かせ、素話をして宣伝した。その間、児童担当の職員は1人で4校ないし5校程度回らなければならぬので人数も必要だが、そういった連携の仕方もある。学校側の負担にならず、図書館のPRもできる。図書館の利用意義をわかってもらえれば、校長先生たちの意識も変わるのではないかと。

会長 この件について、事務局側から現状の説明をしてほしい。

事務局 府中市で行っている団体貸出は、基本的に学級ごとに本を置いており、1クラスにつき50冊まで、期間は6週間以内としている。選書については、現在は来館ではなくFAXでのやりとりが多くなっている。また、本は八ヶ岳や日光、物語といったテーマごとにセットをつくり、セットごと貸出すことが多い。実際の貸出しも巡回便で行うので、先生が来館する機会はほとんどなくなっている。視察や見学の方に、書架には並ばないがこういったセットがあり学級に貸出しているという説明はするが、その他のアピールはほとんどできていない。学校訪問に関しても仰る通りだと思う。しかし、現在はご依頼があったら出向くという形しかとっていない。市内全小学校の新1年生を対象に、4月から5月にかけて、「図書館においでよ」という図書館の利用案内の冊子をお配りしている。本来なら、それを持ってボランティアの方と一緒に訪問すればかなり変わってくるかとは思いますが、実現はできていない。また、学級貸出も市内のすべての学校にご利用いただいているわけではない。校長会や補助員の方を対象とした研修の際にお話はさせていただいているが、学校によって利用数が異なることは事実。市内に33校ある割に、年間の団体貸出冊数は少ないように思われる。

野口 団体貸出の重要性はわかるが、公立図書館から借りることができるとなると、学校図書館の蔵書の充実が遅れるという課題が出てくるのではないかと。公立図書館で借りられるものを学校図書館で買う必要はない、さらに言えば、学校図書館自体の必要性の問題になるのではないかと。図書館と学級とのやりとりではなく、学校図書館を経由してのやりとりをしていくのはどうか。図書館補助員の方とのパイプを密にしていく必要を感じる。

- 茅原 学校訪問は新1年生への図書館の紹介というだけでなく、図書館の補助員の方にとっての勉強の場にもなればよいと思う。公立図書館の案内も、本来は学校図書館で行う方がよいので、そういったことを学んで行ってほしい。
- 金沢 経験上、行政組織を動かすのはとても大変だと思う。図書館が教育委員会に対して何か権限を持って意見を述べるということも難しい。今はあくまで協力関係を持っていけるような、同じ考え方を持つ人を見つけてピンポイントで交渉の場を持っていくしかないのが現状。できないと言い切ってはいけないが、教育委員会や指導室を変えていくことは簡単ではない。学校図書館をどうするのかは教育委員会を通り越しては図書館も意見しづらいとは思う。しかし、待つばかりではなく協力できる先生とつながりを持って図書館としても努力していくべきだ。
- 茅原 現場レベルでできることをしていただければよいと思う。
- 会長 順位づけの話で、後ろに回されるのもそういった温度差があるためなのかもしれない。ピンポイントと表現されたが、関係性をつくっていくことから始め、徐々に共通の認識を持っていけたら順位づけも変わってくるのではないか。できる範囲で連携を図っていければよい。ここまでの図書館と学校との連携や、それ以外に何かご意見があればお願いしたい。
- 鬼丸 先ほどの小学校の新1年生への図書館の案内についてだが、その年齢には少し早いように思う。3年生か4年生くらいを対象に説明し、カードを作るよう促した方が効果的だと思う。また、団体貸出に頼りすぎると学校図書館の予算を削られてしまう恐れもある。それよりも、公立図書館に本を増やしたり来館者を増やすことを優先した方がよいので、子ども向けのイベントを増やしてほしい。近所に図書館がない子どもには、まず学校図書館の補助員がリクエストを管理し、その本を貸出す際に図書館にはこの何倍も本があると教え、図書館に行くよう促してはどうか。登録に関しても、現在は図書館に行かなければカードをつくれませんが、ロールプレイングなどで登録を経験させてあげたりすると子どもは喜ぶと思う。単に広報に図書館ツアーなどの記事を載せるより、そういった場で図書館をPRした方が効果的だ。
- 小島 美術館や郷土の森では全校生徒に無料で利用できるパスポートを配布している。アイデアとしてはいいと思うので、図書館でもそういったものをつくってはどうか。
- 会長 現在は学生証などがIC化されていて、図書館でもそれを導入すれば登録の必要なく利用してもらえるのでメリットがある。しかし、やはりここでもコスト面が課題になってくる。本学でも磁気カードを使っており、別のところではまた違うものを発行しなければならないので手間がかかる。全市民がICカードを持ち、それに図書館のカード機能もついていれば、利用者にも職員にとっても便利なことは確かだ。

事務局 市民カードに図書館のカード機能を持たせてはどうかという話もあった、市民カード自体あまり普及しないのが現状だ。

会長 広報の仕方を工夫し、来館者数を増やすことの方が現実味は高いだろう。

3 その他

野口 以前電子書籍の導入に関する話が出たが、どのような状況になっているのか。

事務局 電子書籍に関しては、現物を使用したことがなくては検討もできないということで、TRCより10月2日から1か月間お試しで電子書籍サービスを提供してもらっている。まずは職員がどういったものなのかを知り、それから検討しようということになっている。先日の議会でも高齢者の方へのサービスに関するご質問もあった。高齢者の方へのサービスということでは、1人の議員の方からデージー図書に関するご質問をうけた。他の出席者はデージー図書自体をご存じないので、何の話をしているのかという雰囲気になっていた。

高田 デージー図書の知名度はまだまだ低く、デージー図書が音訳された図書というところから説明する必要がある。

事務局 その議員の方はご自分でもデージー図書について調べていきたいと仰っていた。

鬼丸 知り合いに弱視の方がいるが、読書家なので音声資料をよく利用している。

野口 アメリカではオーディオブックが普及しているので、視覚障害に関係なく、耳で本を読む習慣のある人が利用している。また、市販品も多く出回っているので、図書館での扱いも多いようだ。

高田 以前、取扱説明書をデージー化してほしいという依頼があった。取扱説明書はほとんど図説なので、それを音声にすることはとても難しい。しかし、依頼をしてきた利用者の方がそれを察して、同じ機器を2台購入し、1台を説明書付きで私たちに貸してくださった。利用者が私たちに気を遣ってくださったことで申し訳ない気持ちになった。

野口 府中市はサピエには加入しているのか。

事務局 加入している。

高田 現在は購入したものを使用しているが、以前の勉強会で自前の音声図書を増やす方向で考えているという話があった。

事務局 購入や、あるいはサピエを通じて借用するのに加えて、作成もしていきたいと考えている。

野口 普通の電子書籍にも音声読み上げの機能があるので、高齢の方や目の不自由な方の利用にもつながるのではないかと。

会長 配信型の場合は複製の際に著作権の問題があり、認証が厳しいものは端末とセットでなければ使用できないといった問題が出てくる。今回トライアルで使用するのどちらか。

- 事務局 配信型。トライアルなのでごく限られた範囲での使用になるが、それを実際使ってみて、府中市に合うのかどうかも含め検討していきたい。
- 鬼丸 本学は端末型を取り入れたことがあったが、既に取り扱いをやめている。端末のメモ機能に心無い書き込みができるので、いじめのきっかけになりかねない。返却の際に確認するのも手間になってしまう。
- 会長 多機能端末だとインターネットでしか使わないということも考えられる。
- 野口 今出ている電子書籍専用端末だと、音声読み上げは英語対応のみになってしまう。
- 鬼丸 CDプレーヤーが一番シンプルで故障も少ないが、メーカーでの取り扱いが減っている。
- 会長 オンラインで配信されているものを見られたら一番よいが、著作権の問題が出てくる。
- 鬼丸 最近では本当に顔と顔を合わせてのコミュニケーションが減ってきている。
- 茅原 読み聞かせもフェイストゥフェイスでやることに意味がある。
- 高田 対面朗読の利用者で、熱心な方は週に3日来館される。しかし、まだまだ利用者は少ないと感じる。対面朗読についてももう少し広くPRしてはどうか。中央図書館でのみ行っているが、以前には私たちが文化センターなどに出向くことを提案したことがあった。
- 野口 地区図書館ではやっていないのか。
- 事務局 行っていない。地区図書館は本を読むスペースや書架を置くスペース自体も確保が難しい状況だ。
- 高田 対面朗読の利用者はとても喜んでくださるし、このサービスを利用したい人はもっといるのではないかと思う。単に本を読んでもらうというだけではなく、コミュニケーションの場としても楽しんでもらっている。
- 鬼丸 読み聞かせと対面朗読の違いを教えてもらいたい。
- 野口 読み聞かせは読む側が1に対して聞く方が多数、対面朗読は1対1で行う。対面朗読は個人の読書ニーズに応えるものだ。対面朗読をしていること自体知らない人が多いのではないか。広報誌に布の絵本の展示があるという記事が出ていたが、その会場で対面朗読のチラシを置いてはどうか。デイジー図書の読み上げ機器の実物を置くのもPRになる。
- 事務局 デイジー図書や対面朗読はお子さんだけではなく大人の方も利用するので、布の絵本の利用者よりも対象が広いが、パンフレットなどを置くことはできる。
- 茅原 デイジー図書は朗読CDとは違うのか。
- 高田 デイジー図書は専用の再生機器が必要になる。流れてくる音声については通常のCDと変わりはない。
- 野口 また、目次出しなど通常のCDではできない機能もついているので、できることの幅が広いことも特長だ。

高田 章ごと、單元ごとに飛ばすことができるのは便利だ。カセットテープは簡単だが、容量が小さいので本数が増えてしまう。

事務局 「よむべえ」という機器もあるが、使い勝手から言うとデイジーの方が便利なようだ。

金沢 録音図書に関連して1点。以前勤務していた図書館では大活字本の利用が少なかった。府中市の図書館ではどうか。大活字本は版も大きくページ数も多いので書架で場所をとってしまうのではないか。

事務局 大活字本はコンスタントに購入していて、利用も多い。1冊ずつが大きいので地区図書館で大型本のスペースを設けるのは難しい。しかし、以前地区図書館で大型本の特集をした際には反響が大きかった。デイジー図書についても、再生機器の貸出しを中央で行っている関係で地区図書館での取り扱いはしていない。

高田 対面朗読に関しては中央図書館だけでなく地区図書館でもできるようにしてもらいたい。悪天候の中で中央図書館まで来ていただかなくてはいけないのは申し訳ない。

鬼丸 中央図書館の多目的ルームは使えないか。

会長 音が出るので他の利用者の反応が心配だ。

高田 対面朗読室も完全防音ではないので、声が漏れて中の様子をうかがう利用者もいる。

野口 対面朗読中という札をドアに下げるのはどうか。PRにもなるかもしれない。

鬼丸 前回の協議会でも提案はしている。

茅原 文化センターなどの部屋に空きはないのか。

事務局 社会教育団体などの利用が多く、市の事業でも部屋を確保できない状況だ。

野口 そもそも、図書館でそういったサービスが行われていること自体があまり知られていない。

会長 これについても、どうアピールしていくかを考える必要がある。紙媒体かホームページへの掲載といった方法になるかと思うが、広報紙への記事掲載はほとんど意味がないようだ。やはり実際に利用した方の口コミがもっとも効果的なのではないか。

事務局 ホームページや広報紙でのPRは今後も続ける。その他にも、関係団体への周知も合わせて行っていく。

鬼丸 視聴者が多いので、J：COMで宣伝すればよい。

事務局 J：COMについては、広報紙から記事をピックアップされるので、市の広報課に働きかける必要がある。

野口 ハンディキャップサービスという名称に高齢の方は抵抗を感じるのではないか。先日鳥取県立図書館に出張したが、ハートフルサービスへ名称を変更したということだった。それで幅広い層の利用者が棚に行きやすくなった。

- 高田 デイジー図書は目の不自由な方だけではなく、必要とする人に広く利用の幅を広げてもいいのではないか。
- 野口 日本図書館協会等で定める著作権法第37条3項に関するガイドラインによれば、「活字をそのままの大きさと読めない」「活字を長時間集中して読むことができない」等、16項目のいずれかに当てはまれば図書館が利用者として判断してよいとしている。
- 金沢 利用率と在庫の問題になるではないか。
- 高田 実感として利用率はそれほど高いとは感じない。
- 事務局 利用の幅を広げ利用率が上がった場合、再生機器の台数が不足することが考えられる。自身で購入するにしても、障害を持つ方には補助が出るが、高齢の方には負担になる。
- 茅原 デイジー図書を作成するボランティアの人数はどのような状況なのか。
- 高田 最近若い方が増えているので、作成の方にも十分な人数が割けている。新しく入った方が以前からいる方に教わって工夫を凝らしたりと、よい関係が出来ている。
- 野口 若い方が集まらないのが全国的に課題になっている中で若いボランティアが増えているのは珍しい。
- 事務局 作成のスピードが上がり作成数も増えている。問題は専用の再生機器の台数だ。
- 野口 市民対象のデモンストレーションなどをしてはどうか。
- 事務局 数年前にそういった講座をやったが、想定していた以上に参加者があり、熱心に機器類を操作している方もいた。それがボランティアの方にもよい刺激になったようだ。残念ながらその後は開催できていない。
- 会長 しかし、講座に参加するのはそういったサービスに関心がある層なので、広く知ってもらおうという目的なら思うような効果が見込めないかもしれない。
- 高田 体験ツアーの際に対面朗読を体験した方が毎週のように来てくださるようになった。実際に体験し、耳で本を聴くことに魅力を感じてもらえたようだ。
- 茅原 対面朗読からデイジー図書の利用者やボランティアになる方が増えればよい。
- 会長 広報のポイントとしてはニーズのないところではなく、あるところにもれなく宣伝していくことだ。明らかになっていないニーズを特定することも必要だが、それには口コミが有効だと考えられる。広報にかけられる費用も限りがあるので、的を絞った広報をしていく必要がある。
- 鬼丸 学校教育の中で保護者を対象に対面朗読のノウハウを教えるのはどうか。幼少期の教育の差はあるところから明らかに出てくる。子どものころにどれだけ本を読んでもらったのか、どういう本を読んだかが大きく影響してくるようになってきている。最近日本のもに限らず世界的に有名な古典も読んだことがないという子どもが多い。

- 会長 流通する情報量がどんどん増えている中で、共通基盤が何かということもはっきりとしないようになってきている。我々が日本の古典と言えばこれだと認識しているものも、現在ではもはや通用しない場合がある。世代間ギャップという言葉は昔からあるが、最近はそのが圧縮され幅がどんどん狭まっているように思う。必要なのは世代間で古典を継承していくというシステムを維持していくことだ。しかし、それを経験しない子どもが増えていて、将来的にそのシステムが消滅してしまうかもしれないという危機的な状況にある。こういった継承のシステムは、通常は家庭教育の範疇にあると思う。しかし、学校教育の中で教える方がコストはかからないので、学校で教えた方がよいという風潮になっている。家庭などで個人的に教える方が効果的なのは明らかなのだが。
- 茅原 教育と読書は別物、という認識で読み聞かせのボランティアをしている。勉強よりも本を通しての方が理解しやすいということもあるので、本に親しむために、子どものうちに親子で本を読む経験をした方がよい。読み聞かせには継承という意味もあるし、人とのつながりという意味もある。現役のお母さんにも読み聞かせを体験してもらい、人づてに伝えていってほしい。
- 会長 今回は特定の審議事項はなく図書館サービス全般について協議したので、話の内容が多岐にわたった。今回はこのあたりで閉会とさせていただきたい。